

# HOPE Bourgogne

## サン・フィリベール教会

文芸評論家

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に「石と光の思想」（勁草書房）、「自然・制度・想像力」「西欧と愛」「経験と超越」「ヨーロッパとは何か」（小沢書店）、他多数。



ディジョンから国道74と6を経由し、ほぼ100キロ南下するとトルニュの町につく。この町には四度きたが、14年前に南のベルビニヤンから北上したときの思い出は鮮やかである。肌寒く8月の半ばとは思えぬほど町には霧が流れていた。ところで遙かな昔にはローマ軍の城塞がここにあった。179年、聖ヴァレリアンがこの地で布教して捕らえられ、首をはねられた。今の地下墳墓にあたる場所という。最初に礼拝所（4世紀）ができ、9世紀に今の教会の基礎ができ、やがて10世紀にほぼ完成した。その間ノルマンティエからノルマンに追われてきた僧たちの奉じる聖フィリベールの遺骨もここに合祀され、やがてその名前が今日の教会の名前となる。

国道から古い家並を通ると、突然、正面に灰白色の城塞風の外観をもったこの教会があらわれる。つくられた時から後、1006年に火事があり、16世紀のユグノー教徒が図書館に大きな被害を与えたものの、いずれも修復されている。正面は975年から1000年にかけて作られたものである。洗礼者志願室は石灰岩の石組で、力強く、三つの梁間を大地的な柱が棕櫚の葉のようにがっしりと天井を支えている。

それを眺めていると、ピレネー山麓でみたサン・ミシェル・ド・キュクサ修道院の地下墳墓を私は思い出した。力感にあふれ、素朴厚重な印象である。初期ロマネスク建築がもつ、装飾性の少ない、簡素な美しさといつてよい。柱頭彫刻さえそこにはない。

身廊部分も同じ印象だ。五つの梁間があり内陣へとつづく。柱は円く、寄せ柱ではなく、殆どそのままに太く床から半円アーチを描いて天井を支える。石灰岩のためか堂内は明るい。秩序と均衡の比類のない印象である。色調はことなるが、カタルーニアのサン・ヴェンセント、ラングドックのサン・ギレーム・ル・デゼール修道院の身廊と共通した装飾による感覚の伸びを排してただちに神に向かうという方向性を人々に与えるのである。

上部半円アーチの支えにはイスラム風の濃淡ある色調の交替があり、その点ではブルゴーニュのサント・マドレーヌ教会と類似している。内陣の周歩回廊には単純な葉模様の柱頭彫刻があるが、中世よりもむしろ古代的な印象である。

私はこの身廊から洗礼者志願室の上にあるサン・ミシェル礼拝堂へと上った。この空間の石組は粗い。しかも壁面の色調は身廊とことなって暗いのだが、高いところに十字架形の窓、その下に二つの直方形の窓があるため、部屋全体はさして沈鬱な感はない。十字架形の窓は時折見られるが、私はイタリア、ロンバルディア地方のサン・ミケール教会の壁面に穿たれているのを思い出した。まさに「十字架の光」である。

かたわらの門に不思議な浮彫りの人像と植物文様がある。何を意味しているのか不明な、謎めいた微笑をうかべるこの人像は土俗的で呪術的でさえある。それはこの礼拝堂を守護するためのものであろうか。あるいはただ単に「遊び」の意味であろうか。中世

人の思考にはいつも神秘をとくように促す働きがある。

私はこのサン・ミシェル礼拝堂を下りて回廊の方へ行った。大きい空間であるが、廊下の天井を支える柱は思いの外に低く、厚い。回廊が囲む中庭の隅に立つと教会の高い塔が視界の半ばを区切る。中庭の樹の濃緑色と塔の灰白色、曇り空が作りだす、落ち着いた世界だ。最初きた時はバリを出てスペインへ車でゆき、ふたたびフランスに戻ってくるという長い三週間の旅もおわりの時であった。夏も去っていくという思いが一方また胸にあった。光は熱気を失い、人々は久しぶりにおのれの「内部」に身をかかめるようになる。回廊をひとり歩いていると、かつての修道士の黙想がわが身にあらわれるようにも感じられた。回廊を歩くこと、その巡りは求心性をもち、「内部」へ「内部」へと心が深まってゆく。

このサン・フィリベール教会の回廊に佇むと、この私にはいつもその最初の思いが昨日のように蘇ってくるのであった。トルニュはまたブルゴーニュ・ロマネスク教会を旅する南からの出発点であり、さらにディジョンのサン・ベニーニュ教会とならんで最古の教会の一つでもある。

それから幾度も私はこの教会へやってきたがその日の印象は何よりも忘れがたい。三度目の時は、あるグループの講師としてきた。それまでの一人旅とはことなって割にいいホテルに泊まることができた。オータンのサン・ラザール教会をたずねた夜もそうだった。私は久しぶりにレストランでブルゴーニュの葡萄酒を心に沁るむような思いで味わった。クロ・ヴァンジョやミヤサ・ニュ・モンラツシエ、ポマール等の銘酒を傾けながら川鱒やエスカルゴ、そして「葡萄酒煮込み」を食べた。留学生の頃、こうした酒は通訳で商社の会合についていったときしか味わったことがなかった。心地よい酔いにブルゴーニュの夜はふけていったのである。

## Château de Chailly

シャトー・ドウ・シャイイ

16世紀のルネッサンス様式のシャトーを改装したホテルです。現在、ゴルフ、リゾートクラブ会員として日仏友好会員を募集しております。ルネッサンス・シャトーを軸として、何世代にも渡る日仏文化交流にご興味をお持ちの方はお問い合わせ下さい。

問い合わせ先: ㈱佐多商会 ブルゴーニュ事業部  
TEL: 03-3586-8873 (東機質ビル内) 担当: 岩 沢

